

機関番号：35404

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20510233

研究課題名（和文） 南アジア周縁地域から日本への人的移動とネットワーク形成

研究課題名（英文） The Study on the Human Movement from South Asian Peripheries to Japan and its Network

研究代表者

高田 峰夫（TAKADA MINEO）

広島修道大学・人文学部・教授

研究者番号：80258277

研究成果の概要（和文）：

本研究では、在日バングラデシュ人と在日ネパール人を中心に、韓国（東アジア）とタイ（東南アジア）のバングラデシュ人とネパール人についても調査した。その結果、日本の各コミュニティが日本を越えたネットワークを形成していることが判明した。一方、当初想定していた南アジア出身者としての両コミュニティの結びつきは見られなかった。また、タイについては、東アジア（日本と韓国）とは異なったネットワークのあり方が見られた。これは、東南アジアに位置する（すなわち、国内にイスラム教徒がいる）仏教国という側面が影響していると思われる。

研究成果の概要（英文）：

This project deals with the Bangladeshis and the Nepalis in Japan as well as those in South Korea and Thailand with the aim to cover the cross-border network of those peoples between South, Southeast and East Asia. It is concluded that both Bangladeshi and Nepali communities in Japan have developed their network beyond the national border of the host country. Prior to the project it was expected that the networking beyond each ethnic communities might be found, but in reality such relations were seldom discovered both in Japan and in South Korea. The case of those in Thailand is found to be slightly different due to the geographical and religious characteristics of this country.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：複合新領域・地域

キーワード：南アジア周辺地域、日本、ネットワーク、ネパール人、バングラデシュ

1. 研究開始当初の背景

本研究は「バングラデシュの社会経済的格差と労働移動に関する実証的研究：境界を越える人々」（文部科学省「世界を対象とした

ニーズ対応型地域研究推進事業」の一部として行った滞日バングラデシュ人調査を踏まえ、南アジア系の人々のなかでも、インド人の背景に隠れて見えにくくなっている南

アジア周縁諸国からの人の移動に注目して計画された。その際、特にバングラデシュ人（ムスリム/ベンガリ）と宗教的・民族的に異なるネパール人（ヒンドゥー、仏教徒/多民族）を新たに研究対象とした。まだ、移動先についても、日本への移動を基本としながらも、受入国としての日本を相対化するために、韓国やタイも考察の対象とした。

2. 研究の目的

南アジア諸国からの日本への移動を従来の国別コミュニティ研究にとどまるのではなく、出身国を越えた南アジア地域出身者という側面に注目し、南アジア周縁地域出身者の相互のネットワークの有無を明らかにすること、また、日本社会で形成されたネットワークの機能を明らかにする。

また、受入国である日本国内と送出側とのあいだを結ぶネットワークだけでなく、他の東アジア、東南アジアとの繋がり有無も視野にいった。

3. 研究の方法

エスニックマガジンの内容を、使用言語、編集者や会計担当者など運営に係る人々の属性、広告や記事の内容などからその意味するところを分析。

バングラデシュの日本語学校での聞き取り調査と、そこから明らかになった日本側の日本語学校の関与について考察。

外国人登録関係資料および在日ネパール人への聞き取り調査をもとに、日本のネパール人コミュニティの性質について分析。

在外ネパール人協会のネパール語資料の分析。

韓国でのバングラデシュ人コミュニティへの聞き取り調査ならびにアンケート調査より在韓バングラデシュ人コミュニティと在日バングラデシュ人コミュニティの比較。

韓国のネパール料理店での聞き取り調査より、ネパール-韓国-日本を結ぶ政治活動のネットワークの追跡。

バンコクのバングラデシュ人コミュニティへの聞き取り調査。

バンコクのビルマ系ネパール人への聞き取り調査ならびに参与観察。

4. 研究成果

本研究で明らかになったのは、南アジアから東アジアへの移動に、ひとつは、日本語学校が重要な役割を果たしていること、およびもうひとつは、親族を中心に地縁・血縁ネットワークが形成されていることである。ヨーロッパ諸国に植民地化されなかったがゆえに言語的に孤立している東アジア諸国への人口移動経路として、語学校の役割の重要性

が判明したと言えよう。これは、ヨーロッパに移住した南アジア系住民が宗教別にコミュニティを作ることが多いことを鑑みると、東アジアの特徴として注目に値するであろう。

また、ほぼ単一民族に近い在日バングラデシュ人社会で流通するエスニック・マガジン『ポロバシュ』の分析から、在日バングラデシュ人の本国志向性などが明らかになるとともに、すでに滞日期間が長くなり、日本で次世代を形成しているにもかかわらず、日本社会（ホスト社会）への関心が低いことも判明した。おそらくこの事実と関係しているであろうことは、『ポロバシュ』が同人誌的性格を強く帯びていることである。この点は特に広告内容の分析から導きだされる。

在日ネパール人については、1980年代後半に政府間協定によって多数の労働者が実質的な単純労働力として入国していたバングラデシュ人の場合と異なる様相を示していたが、それでも一定数、浜松などに労働者が集住していたが、日本の入管政策の変化によりこれらの労働者は一斉に帰国した。そのため、在日ネパール人の階層に変化が見られ、労働者層ではなくビジネスに携わる者たちが新たな層を形成して、杉並区、世田谷区などに集まるようになっていく。すなわち、これらの地区における人口増加が見られること、また、都内のエスニック料理店におけるインド（南アジアの中心）人とネパール（周縁）人の雇用被雇用関係の変化が観察される。従来はインド人に雇用される側にあったネパール人が自ら雇用主となるケースが増えている。

このような傾向は、在外のネパール人の政治活動にも変化をもたらしている。世界中に広がるネットワーク、在外ネパール人協会の会長に大阪在住のネパール人が新たに選出されるなど、グローバルなネパール人ネットワークにおける在日ネパール人の占める位置が大きくなっていることがわかった。

韓国では、移民労働者組合においてネパール人とバングラデシュ人が中心的役割を果たしている。そこには、南アジア出身であるという「近さ」だけでなく、いずれも韓国の外国人社会のなかで最下位に置かれていることが関係していると考えられる。また、韓国社会では、日本社会で見られるような、現地の女性との結婚はほとんど見られない点も、ホスト社会の違いを見るうえで注目できる。さらに、在日バングラデシュ人はイスラム教地域から来ている他の外国人などとモスクで接触があるが、在韓バングラデシュ人社会ではキリスト教会が積極的な役割を担っている。これがホスト社会での宗教のあり方と関係していることは言うまでもないだろう。

また、在韓ネパール人は在外ネパール人協会韓国支部によって組織化されている側面が強い。拠点はエスニックレストランならびに食材店で、この点は日本と同様である。

日本、韓国と同様、東南アジアではヨーロッパの植民地とならなかったタイにも、南アジア系コミュニティーが存在するが、その内実はインド系だけでなく、バングラデシュ人（ムスリム）、ネパール人（ヒンドゥーおよび仏教徒）が存在している。ネパール人はその圧倒的多数がビルマ経由でタイに定住するに至ったビルマ系ネパール人で、存在形態が多様であり、在外ネパール人協会と緩やかに関係をもちつつも、実態が把握されていない。タイの南アジア系ムスリムについても、タイ・ムスリムとは異なり、仏教国における「マイノリティの中のマイノリティ」としてほとんど実態が把握されてこなかった。タイのビルマ系ネパール人、タイの南アジア系ムスリムについては、今後取り組むべき課題であることが判明した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

荒木一視、第一次フードレジームと英領インドの農作物貿易、広島大学現代インド地域研究 空間と社会、査読有、第1号、2011、59-78

高田峰夫、山本真弓、バンコク在住「ビルマ系ネパール人」に関する覚書、広島修大論集、査読無、第51巻2号、2011、193-208

高田峰夫、バンコクのバングラデシュ人社会についての予備的考察—タイ社会の変化とグローバル化の中で、広島修大論集、第51巻1号、査読無、2010、171-195

三宅博之、韓国におけるバングラデシュ人労働者の実態調査結果とその解説、北九州市立大学法政論集、査読無、第38巻4号、2011、91-110

山本真弓、在日バングラデシュ人の滞日形態とネットワーク形成をめぐる覚書、山口大学文学会志、査読無、第60巻、2010、23-37

高田峰夫、在日バングラデシュ人のエスニック・メディア『ポロバシュ』を事例として、広島修大論集、査読無、第50巻10号、2009、47-69

山本真弓、荒木一視、バングラデシュにおける人口移動と社会階層—農村部から日本への出稼ぎ労働者を中心に—、山口大学文学会志、査読無、第59巻、2009、75-95

〔学会発表〕（計9件）

三宅博之、バングラデシュ人労働者と多文化政策を模索する韓国社会、九州南アジア研

究会、2010、福岡大学。

高田峰夫、在日バングラデシュ人のエスニック・メディア『ポロバシュ』を事例として、日本南アジア学会第22回大会、2009、北九州市立大学

荒木一視、山本真弓、バングラデシュの出稼ぎ労働者—4ヶ村のアンケート調査からみた送り出し側の社会、日本地理学会、2009、帝京大学

高田峰夫、語学校を通じた日本とバングラデシュのつながり、伝承文化研究会、2009、東京飯田橋。

荒木一視、Extensive household survey results with supplementary interviews with families left behind in Bangladeshi village, The International Seminar on Migration, Human Security and Immigration Policy、2008、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

高田峰夫、Interviews with returnees from Japan in Dhaka, The International Seminar on Migration, Human Security and Immigration Policy、2008、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

三宅博之、Interviews with migrant workers in Seoul, The International Seminar on Migration, Human Security and Immigration Policy、2008、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

高田峰夫、Analysis of the ethnic journal “Porobash” in Japan, The International Seminar on Migration, Human Security and Immigration Policy、2008、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

山本真弓、バングラデシュ農村部悉皆調査の中間報告、日本南アジア学会九州支部臨時研究会、2008、北九州市立大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高田 峰夫 (TAKADA MINEO)
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：80258277

山本 真弓 (YAMAMOTO MAYUMI)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：50230587
(H22.10 退職をもって組織より抜ける)

(2) 研究分担者

荒木 一視 (ARAKI HITOSHI)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：80254663
三宅 博之 (MIYAKE HIROYUKI)
北九州市立大学・法学部・教授
研究者番号：60211596

(3)連携研究者
()

研究者番号：